



新 毎 日 新 聞

10月15日(金)

2010年(平成22年)

中国で障害者の雇用創出を支援

全盲の日本語教師、青木陽子さん(48)「さいたま市見沼区」が、中国で目の不自由な人の雇用を生み出す取り組みを計画している。さいたま市内の会社が開発した、だれもが扱いやすい発泡スチロール再生処理機を置く作業所を整備する。青木さんは「モノを送る国際協力ではなく、現地の人々の自立につながる支援をしたい」と実現を目指している。

【稲田佳代】

93年に中国・天津市へ渡った青木さんは、翌年に視覚障害者が無料で学べる日本語学校を設立した。米ペンシルベニア大博士課程に在学中、「教育格差の解消に取り組もう」と決意したのがきっかけだ。

これまで健常者209人を含めた計455人を受け入れた。今年7月、友好親善への貢献から外務大臣表彰を受けた。現在も年の大半を天津市で過ごす。

今年になって知り合ったのが、IT機器開発・産廃中間処理「ニックスジャパン」(さいたま市北区)の中島絃司社長(68)。「母子家庭で周囲に助けられて育ったので福祉の活動で社会貢献したい」

「モノでなく自立を」

との思いから、障害者を積極的に工場で雇用してきた。

同社が開発した発泡スチロールの廃容器を再資源化する処理機(幅、奥行き約1.5m、高さ1.75m)は、容器を投入口から入れた

後は全自動で処理されるため難しい操作が

要なく、視覚障害者でも扱いやすい。処理後は白く高品質で、中国企業が買い取りに来るなど実績を重ねつつある。「機械を置く作業所ができれば、障害者の安定的な収入につな

ニックスジャパンが開発した発泡スチロールの処理機を体験してみる青木さん(左から2人目)と中島社長。右下が再資源化した発泡スチロール

がる」と考えた青木さんは中国で作業所づくりに協力してくれる企業探しに奔走。中島さんも技術面で積極的に協力する予定だ。

青木さんは「最初は小規模でも、将来的には障害者が会社を作って障害者を雇用できるまでになりたい」と話している。

